

## 巻頭言 「ルノワールの画集」

宇野 元

牧師館の部屋や廊下のところどころに、函入りの画集を置いています。アトリエの壁にキャンバスを立て掛けておくような気持ちで。時おり、場所を変えたり、取り替えたりして。そんな中に、ルノワールの画集があります。むかし小学館から出た『ファブリ版世界の美術』のなかの一卷です。このシリーズには、懐かしい思い出があります。新しい巻が出るたびに、仕事帰りの父が、オフィスビル内の書店に立ち寄って、風呂敷に包んで届けてくれました。

印象派を代表する画家の一人、多くの人に愛されるルノワール。反面、現世的な、軽い画家であるかのように考えられることもありますね。背伸びした年頃、仲間のあいだでは、もっとシリアスな作風の画家を話題にしていました。

今、この古い画集を眺めると、人物の帽子や服に、当時のフランスの流行がよく記録されているのに気づきますが、丹念に描かれたコップや、活けた花、犬や猫、子どものリボン、そうした日常の小物や動物に、不思議ないとおしさを感じます。百年以上も前の、それも外国の生活の絵でありながら、その自然さのゆえに、見る者自身の時を重ねることができるからでしょう。また、有名な「ムーラン・ド・ラ・ギャレットの舞踏会」や「ぶらんこ」や「舟遊びをする人々の昼食」などの、木漏れ日を浴びる若い人たちの華やいだ姿に圧倒され、画家の将来の妻をモデルにした、草の上に座る女性の慎ましい美しさに打たれます。

今の時と、共にある人や、身の回りのものや、命あるものたちに思いを寄せることは、永遠を思うことと少しも矛盾しない。画家がウインクしてそう語りかけてくれるようです。心をひらいて、身近なものたちを、神の愛の豊かな印として受けとめ、感謝するとき、将来の幸いを望む私たちの心はいっそう確かにされるはずです。そして、イエス・キリストにある恵みをたずねるほどに、なんの変哲もないような日常の歩みが、新鮮な、生き生きしたものになるでしょう。

「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。」(ローマ 8, 32)